

「千世までの雪かとみれば松風にたくひて鶴の声を聞ゆる」（『貫之集』巻一）

「松が枝に鶴かと思ゆる白雪は積れる年のしるしなりけり」（同 巻三）

などその例である。漢詩に基づく比喩は、常識的・規約的な比喩として平安人の詩はもちろん、歌の世界にも流行する。

（『古今集以前』二五八～二六四頁）

更に、小島憲之氏は「誤：疑」の表現について次のように論じられている。

「誤」の用法は、詩でいえば、盛唐ごろから例が多くなる。「誤つ」ことは直線的にいえば「似ること」（「如し」に同じ）にもなるが、屈折していえば「…ではないかと疑う、思う」ことでもある。道真の詩には、「誤」と「疑」との対比の詩句が数例もみえる。

たとえば、

「晴れては誤つ雲を穿ちて星の乍に見ゆるかと、秋には疑ふ雨を冒して菊の新に開くかと」

（巻五、「賦雨夜紗燈、応製」）

「雪の別鶴驚くかと誤ち、野の幽蘭を払ふかと疑ふ」

（同、「風中琴」）

は、その一例。

（『古今集以前』二六五～二六六頁）